

『ぎよぶりのり』

作者 浅羽 一



らもうすでに経験人数が二桁に達しようとしている男だけある。こんな味覚馬鹿の何処が良いんだと新しい彼女の画像を携帯電話で見せられるたびに密かに思っていた過去の自分を猛省した。

「女と上手く付き合う秘訣は、分からないなりに女心を考えてやる事だよ」

長く続いても交際期間が二ヶ月くらいしか保たない男とはとても思えない素敵発言を自信満々に語れるその姿勢こそが魅力なのかも知れない。僕はもう三枚重ねで目から鱗が落ちていく気分だった。

「あ、ちなみのその子、かなり可愛いぞ」

いっそも目玉が手紙の上に落ちそうになるほどの勢いで文面を読み返す。改めて確認してみても間違いない。そこに記されたクラスは友人の在籍するそれと同じだった。

「まあ、頑張れよ。恋愛なんてのは愛するよりも愛されるよりも、愛させる事が一番なんだから」

さながら神か悪魔でも目の当たりにした気分を味わいながら、ようやく僕にも生まれて初めて「彼女」なる相手が出来ると期待と喜びで空っぽの胃袋さえも満たされていくのを実感していた。

○

「正直、もつと落ち着いた人だと思ってたのに、いざ付き合ったら何か違うんだよね」

放課後、心なしか虚しそうに語る同じクラスの女子に机を挟んで相槌を返しつつ、「それって、どんな風に」と俺は尋ねた。口調は勿論、いかにも君の事を心から案じていると言う感じで。声はとりあえずわざとらしくならない範囲で低く低く。

「いい人なんだって分かるんだ。本当に、いつも私のして欲しい事を優先してくれるし、考えてくれてるのも分かるんだ。けど…」

「あんまり優しくされすぎると、ちよつと重いつて言うか、引け目に感じちゃう？」

「…うん。こんな風に考えるのって、私が間違ってるんだよね」

俺は迷わずこう答えた、「そんな事ないんじゃないかな」と。それから続けて「むしろ、それって優しい証拠じゃない」と。

「だってさ、言ってみれば都合の良い相手じゃん。適当に付き合っていくならある意味じゃ最高でしょ。だけど、そうじゃなくて、ちゃんと自分や相手の事だけじゃなくお互いの事として考えてる」

すると二ヶ月前に自分からの告白で付き合い始めた相手との関係性に悩んでいると語っていた彼女は、ほんのかすかながらも気分が軽くなったような表情を浮かべてくれた。

「うん、そうかも…。やっぱり、こんな付き合い方ってお互いに良くないよね」

ほら来た、決して顔には出さずそう思った。大抵の場合、こんな身勝手な女は最終的に「お互いの為」なんて言葉を免罪符として使いたがる。しかも何よりも質が悪い事に、そんな台詞を平気で出してくる女に限って寂しくなったら途端に惚れっぽくなってしまふ。適当に付き合っていく分には最高だが、真剣に将来を考えるのはそれこそお互いの為にな

りにくい。

「私、どうすれば良いかな」

結論なんてすでに出ているのだ。ただ、要するにそれを「自分からの選択」としたくないだけで。だからこそ俺はしばらくの間、深く考えている風を装った後、こう言った。

「辛いかも知れないけどさ、やっぱりお互いの為を考えてたら、別れるべきなのかも知れないね」

果たして、彼女はぱつと顔を上げてこちらを睨み付けるように見つめてくるも、しかし反論は一言も発さなかった。だから俺は待った、じつと目を逸らさずに。

先に視線を背けたのは彼女の方で、俯いた彼女は深い溜息を吐いた後、「…うん。そうだよ」と言ってきた。俺は「うん」と答えながら、ぽんぽんと彼女のつむじの辺りに手を置いた。鼻を吸る音が聞こえてきて、俺はしばらくそれを無言で眺めていた。

我ながら酷い男だと自覚しているつもりだったが、こいつも大概だなと心底呆れた。

「…でも、分かってくれるかな」

ひとしきり泣いて満足したのか、それとも十分にアピール出来たと確信したのか、改めて顔を上げた彼女の声はもう震えていなかった。

俺は素直に頷いた。「きつと、大丈夫だよ」と。

嘘を吐いているつもりは無かったし、実際、その通りだろうと思っていた。何故なら、もしもそれが俺ならば、別れたいと告げた時は後腐れ無く別れて貰いたいものだから。

こちらの発言に自信を持ったのか、傍目にもはつきりとさっさと頭を切り換え始めた女を眺めながらぼんやりと考えた。

このまま行けば、こいつでおそらく十人目。実は人気があるくせに自信が足りないせいでいつも傷つく友人と、そんな彼への想いで悩んで苦しみ挙げ句の果てに別の男へ流れる女生徒達。全くもって理不尽な話だが、青春なんてそんなもんだらう。

窓の外は文句なしの快晴で、どうやら明日も晴れそうだった。この後どういう流れになるにせよ、とりあえずコンビニに寄って炭酸のきついジュースを買って飲もうと決めた。

〈了〉